

2022年度 自己評価結果公表シート

富山短期大学付属みどり野幼稚園

1 本園の教育目標

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 心も体も健康でいきいきとした子ども2 自分の思いや考えにもとづいて、園の生活に取り組む子ども3 友だちと共に園の生活を楽しみ、意欲的に行動する子ども4 身近な自然や人とのかかわりに心を動かし、感じたことや考えたことを素直に表現する子ども |
|---|

2 本年度、重点的に取り組む目標・計画

- | |
|--|
| <p>依然として新型コロナウイルス感染症の影響が懸念されるものの、幼稚園型認定こども園としての安定した運営を基盤として、安全かつ安心できる生活と、幼児期にふさわしい経験の提供をめざす。また、次の2点を重点課題として取り組みたい。</p> <ol style="list-style-type: none">① カリキュラムマネジメントの実践 ～ 週月案の作成と評価② ICT 活用による保育の充実と子育て支援 |
|--|

<昨年度の公表シートから：令和4年度に取り組むべき課題>

① 健康で安全な生活の保障（継続）

新型コロナウイルス対策を継続して実施し、感染症対策に努めるとともに、子どもに必要な経験（園内外での集団活動や食に関する活動を含む）を保障するための、配慮や工夫を検討する。

② 保育記録の検討とPDCA サイクルの充実（継続）

本年度までに取り組んだ「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた教育課程・長期指導計画を土台としながら、成と保育実践の振り返り（PDCA サイクル）の充実を図るためにも、指導のねらいを適切に評価し、保育改善につなぐ保育記録の方法を検討する。

③ 保育環境の充実

子どもの適切な評価から、園内及び園庭環境の改善、教材研究を進める。

④ ICT 活用による保育の充実と子育て支援

子どもの直接体験を重視しながら、効果的な ICT 活用を図るとともに、保護者への情報発信及び情報共有のツールとしての ICT 活用を図る。

3 評価項目の達成及び取り組み状況

① 園運営	引き続き新型コロナウイルスの影響が大きい1年であったが、これまでの経験を活かし、（感染者や濃厚接触者の発生時も含め）適時適切な対応を選択しながら、日常保育の継続に努めた。また、コロナ禍で制限していた行事なども、形態や内容などを工夫することで、実現することができた（もちつき、クッキング、異年齢交流、保護者会開催、保護者の保育参加など）。コロナ禍の制限によって、改めて「大切なこと」を確認し、よりよいシステム等を見出すことができた例もある。With コロナの立場から、今後の保育運営向上につながる1年であったと考える。職員体制に大きな変化があり、各職員の業務負担が重くなる中で、全職員が相互に支え合いながら、子どもの教育経験の保障及び家庭との連携に努めてきた。園児確保や多様な保育ニーズへの対応等取り組むべき課題は多いが、確かなチームワークを基盤に、柔軟な発想で次年度運営にあたりたい。
-------	--

② 教育課程	<p>昨年度から継続して取り組む「教育課程研究」の中で、幼児の姿に基づく計画作成に重点を置き、ウェブ図を用いた週月案作成を行った。子どもの遊びを丁寧に観察し、子どもの思いを汲み取りながら文字に表すことで、子どもの興味・関心と遊びの流れが変化する様子を具体的に理解することができた。そのような流れを図式化することで、保育者自身の意図（関わりや環境構成）を再確認するとともに、必要な関わりや保育の方向性を考える手立てとなった。これらの取り組みが、結果として、教育課程や「幼児期に育てたい10の姿」を意識した保育実践につながった。</p>
③ 保育指導	<p>園児の主体的な経験を尊重し、コロナ禍でもできることを模索して、日々の保育や行事の運営に取り組んだ。一定の制限はあるものの、他学年との交流機会を前年度より増やしたことで、年上の子どもの行動を自らの遊びに活かそうとする姿や、年下の子どもの立場を思いやって行動する姿が見られ、子どもの経験に活かされている実感をもった。年間を通して、web 図を用いた記録と計画作成に取り組んだことで、遊びの内容と子どもの経験を丁寧に振り返り、必要な環境構成を考えたり、保育のねらいを精査したりすることができた。そのことが、子どもの興味・関心の流れに沿った保育展開につながり、保育教材や環境構成の工夫、社会への関心の広がりなど、多様な子どもの経験を保障することとなった。</p> <p>教育時間終了後の保育について、利用人数や必要時間の状況を考慮したグループ編成や保育内容を行うなど、充実した生活時間を過ごせるように努めた。また、園全体でのPDCA サイクル充実への取り組みが、個々の子どもの課題を共有することとなり、教育時間終了後の保育指導とクラスでの保育指導との連携に活かされた。同様に、幼小連携においても、窓口となる担当者とクラス担任が互いに情報を共有しながら指導をすすめていくことができた。</p>
④ 幼児理解	<p>これまで、子どもの思いに寄り添い、丁寧に関わることで、幼児理解に努めてきたが、そのやり取りを web 図で表現していくことで、個々の思いや行動が把握しやすくなり、理解が深まった。また、web 図を通して対話する機会が増えたことで、個々の子ども理解を職員間で共有することにつながった。共通理解のもとでの保育実践と振り返りが、クラス内での幼児理解の深まりとなっただけでなく、クラスを超えた理解と指導をもたらした。</p>
⑤ 健康・安全	<p>感染症対策や健康支援については、新任の看護師の協力を得て十分に実施できた。一方、子どもの健康について、保護者と課題意識を共有し、改善につなげていく取り組みには、さらなる努力が必要である。本年度は、園バス事故や不適切保育による事件報道があったこともあり、安心・安全についての見直し・改善を行った。園バス乗務員と保育者との相互確認や園児自身が危険を訴えることのできるシステムを作る中で、必要な備品（安全ブザー等）や規程類（運行規程、チェックリスト、座席表等）を整えた。園外保育における事故の危険性を考慮し、計画時の確認に加えて、当日の天候や施設状況を詳細に確認し、情報共有を図ったうえで実施するように努めた。園内で起きた事故に対しては、事故の背景・要因、対処法を職員会議で分析・検討することで、リスク意識の共有と保育環境の改善につなげた。子どもの安心を守るための行動として、全職員が、人権擁護のセルフチェックリスト等を用いた討議を行い、適切な子どもへの関わりを再確認した。</p>
⑥ 子育て支援	<p>コロナ禍の制限が十分に解除されない中で、全ての保護者が保育参加の機会を得ることができるよう、個々の事情に応じた柔軟な実施に努めた。園生活での我</p>

	<p>が子の姿を知るとともに、他児との関わりをもつことで、子ども理解や保育理解が深まった。特に、入園間もない年少児クラスでは、保護者同志が交流する時間をもち、関係をつくる配慮を行った。子育ての悩みに対しては、担任が丁寧に対応するほか、主幹保育教諭、副園長が内容に応じて相談窓口となったり、園長の子育て相談を利用したりするなど、園全体で対応するように努めた。</p> <p>親子サークルは、計画どおり30回実施することができた。卒園児や在園児の保護者などが講師・ボランティアとして参加し、地域の子育て家庭を園全体で応援する取り組みができた。園庭での遊びや提供する経験内容の充実から、広範囲の地域から参加を得ることができたことも成果の1つである。</p>
<p>⑦ 職員の研修及び資質向上</p>	<p>教育課程研究の成果について、東海・北陸ブロック研究大会で発表を行った。また、令和5年度の継続発表に向けて、全職員がウェブ図を活用した週月案作成に取り組んだことで、職員相互の共通理解と対話が促進され、教育の質向上につながったと思う。各職員の意識の高まりが、園の協働性を高め、PDCAサイクルの好循環をもたらした。加えて、ミドルリーダー研修や数多くのリモート研修を選択的に受講することにより、それぞれの資質向上にもつながった。</p>
<p>⑧ 地域との交流（学園内交流含む）</p>	<p>コロナ禍で、地域との交流行事は行えなかったものの、遊びでの子どもの興味をもとに、地域の施設（神社など）に出向き、施設の方との対話を行うことで、社会生活への関心を深めた。特に年長児は、海外の友達とのZOOM交流をきっかけに、国外の文化や食に関心をもち、家庭を巻き込みながら、多くの情報を収集し、互いに発表しあう経験を重ねることができた。その経験が「みどりのえんにち」の遊びにつながり、入園後、一度も行事に参加することができなかった「祖父母世代」を招くまでに発展したことで、高齢者との交流を楽しむことができた。日々の保育の積み重ねから、子どもたち自身が「社会生活とのつながり」を深く感じていくことを、再認識した1年だった。</p> <p>本年度は、短大生の実習時間が少し回復したことに加え、夏季休業中の保育ボランティア参加もあり、園児と短大学生との交流機会を多くもつことができた。また、14歳の挑戦（中学生）や富山国際大学生の保育サポーターの受け入れ、園児のきょうだいによる保育ボランティアの実施、Tボール講習会の実施など、コロナ禍の制限がある中で、多様な人との交流の輪を広げる取り組みができた。</p>

＜全体的な評価＞

新型コロナウイルスによる制限を持続しながらも、「子どもにとって大切なこと」を念頭に、可能な限り実現できるよう工夫を重ねてきた。その背景には、with コロナとしての保育や家庭支援のあり方に、園として少しずつ見通しが持てるようになってきたことがある。また、昨年度から取りくんでいる教育課程をテーマにした研究は、幼児理解の深まり、保育指導の充実につながるだけでなく、保育者間の協働性を高め、園全体で一人一人の子どもを保育していく基盤を醸成しつつある。カリキュラムマネジメントが定着し、適切な教材選択・環境構成と、保育者のねらい・関わりが好循環を示すことで、多様な子どもの姿を受容し、一人一人の豊かな経験を保障することにつながっていくと期待される。

重点課題の1つであるICT活用については、保育や保護者アンケート、ブログ発信等を行った。また、同窓生とのつながりを強化するためにも、ICT活用を試みた。次年度以降は、保護者との情報共有や書類提出等にも活用を検討していきたいと考える。

本年度は、子どもの安全や安心を支える保育への社会的要求が一層高まり、本園でもバス運行の安全確保や園内外での事故予防、子どもの人権を尊重した保育の実施に向けて、具体的な検討と対処を重ねてきた。保護者アンケートの内容からは、保護者との情報共有などにおいて、改善すべき点は多い。改めて園

体制の充実を図り、子どもと家庭、園（職員）が、互いに安心して信頼関係を育み、質の高い保育・教育を提供できるよう努めていきたいと考える。

〈次年度に取り組むべき課題〉

- ① 健康で安全な生活の保障（継続）
感染症対策にとどまらず、子どもの安心と安全を守る保育に必要な環境をつくる。
- ② 持続可能な保育記録・計画の検討とPDCAサイクルの充実（継続）
本年度までに取り組んだ記録・計画の作成方法や、教育課程の見直しについて、今後も持続可能なあり方を探っていく。
- ③ ICT活用による保育の充実と子育て支援（継続）
子どもの直接体験を重視しながら、効果的なICT活用を図るとともに、保護者への情報発信及び情報共有のツールとしてのICT活用を図る。
- ④ 多様な個性に応じた保育内容の検討
一人一人の個性を生かしながら集団としての経験を高める保育内容について検討する。

以上の自己評価と保護者アンケートの結果を、3月27日（月）の関係者会議で報告をいたしました。会議では、主に、園運営（教育や家庭支援）向上のために必要な「人的・物的資源」について、及び園のコンプライアンスについて、意見が交換されました。

保護者の皆様や関係者の方の意見を活かし、令和5年度の園運営に当たりたいと思います。

令和5年3月31日
富山短期大学附属みどり野幼稚園
石 動 瑞 代